

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：17701

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K21652

研究課題名（和文）奄美群島の戦争に関する「記憶」の記録と継承をめぐる学際的研究

研究課題名（英文）An Interdisciplinary Study on the Recording of Memories of the War in the Amami Islands

研究代表者

兼城 系絵（KANESHIRO, Itoe）

鹿児島大学・法文教育学域法文学系・准教授

研究者番号：40709482

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、奄美群島の戦跡に焦点をあて、島嶼部で経験された戦争が如何なるものであったかを考古学・文化人類学・歴史学の立場から明らかにし、戦争体験を継承する方法論の構築を目指したものである。研究期間においては、奄美群島の戦争遺跡の踏査を実施したほか、戦争遺跡の中でも地域社会との関わりが強かった奉安殿に焦点を当て聞き取り調査を実施することで、戦時下の島嶼地域ならではの戦争体験の一端を明らかにすることができた。また、次世代への継承に関しては、当事者性の獲得が重要だということがみえてきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、奄美群島の戦争遺跡について、考古学・文化人類学・歴史学という複数の位相から捉え、次世代へ継承する方法について学際的な視点から検討したことである。そして、その研究成果をそれぞれの研究に活用するだけでなく、ポスターやブックレットを発行することによって、地域社会に還元したことに社会的意義がある

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the war sites in the Amami Islands, and aims to clarify from the standpoints of archaeology, cultural anthropology, and history what the war experienced on the islands was like, and to construct a methodology for passing on the war experience. During the research period, we conducted fieldwork at war sites in the Amami Islands and conducted interviews focusing on Hoanden, which had a strong relationship with the local community, to clarify some aspects of the war experience unique to the islands during the war.

研究分野：文化人類学

キーワード：戦跡 戦争体験 奄美群島 記憶の継承

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

奄美群島は、本土防衛という観点から軍事上重要な地域として位置付けられ、明治から昭和にかけて継続的に軍事関連施設が建築されてきた。しかし、結果的に実戦に使われなかったことから、現在も「戦争遺跡」(以下、戦跡とする)として複数の元軍事関連施設が良好な状態で現存している。当科研のメンバーにより、奄美大島の文化財関係職員を対象に戦跡研究の現状に関するヒアリングを実施したところ、「群島内における戦跡の認知度の低さ」や「戦争体験の証言が十分に収集されていない」という現状が存在していた。加えていえば、終戦から70年以上が経過した現在、戦争体験者の証言や歴史資料に基づく戦争記録と戦跡を直接照らし合わせて、相互の価値や歴史認識を検証し得る最後の時期に差し掛かっている。こうした背景のもと、本研究が構想された。

2. 研究の目的

本研究は奄美群島の戦跡を対象とし、島嶼部で経験された戦争がいかなるものであったかを検証した上で、考古学・文化人類学・歴史学の立場から戦争体験を継承・活用していく方法論を構築することを目的としている。特に、戦跡が実際に機能していた時期から現在に至るまでの時間的経過にともなう地域社会の中での位置付けの変化に着目し、地域の歴史遺産として新たな価値を見出すとともに、今後の平和教育に活用する方法を提示することを目指した。

3. 研究の方法

本研究は、以下のような研究方法で実施された。

(1) 奄美群島における戦跡の踏査と記録化

奄美群島の戦跡は良好な状態で多数残存しているが、人手不足等の理由により測量や実測などの記録作業が遅れているのが現状である。そこで、本研究では、戦跡の踏査や現状確認を行うとともに、複数視点からの画像を基に対象物の三次元情報を取得する SfM (Structure from Motion) を用いた効率的な記録化を推進した。それと同時に、LiDAR を用いた記録化も実施した。

(2) 戦跡に関する記憶の収集と再構築

本研究では戦跡を記憶のトリガーとしてとらえ、奄美群島内で経験された「島の戦争」の記憶を収集する。調査対象地域の戦跡の多くは、地域の人々の生活圏内に残されていることが特徴である。これらの戦跡が旧日本軍だけではなく現地住民の手も借りながら建設・運営されたことを踏まえると、戦跡の存在が地域社会に多大な影響を与えたことが予想される。そこで、「人びとの生活と密接に関わった戦跡」と直接的・間接的に関わってきた方々を対象に聞き取り調査を実施し、地域社会と戦跡の関係をはじめとする「島の戦争」に関する語りを幅広く収集した。その上で、島嶼部における戦争経験について体系的な整理を試みた。特に、地域社会との関わりが密接な奉安殿のような戦争遺跡に注目して調査を実施した。

(3) 戦跡に関する記憶の継承と活用に関する方法論の構築

従来の文献史料に基づく近代史研究の成果に、戦跡考古学(1)や聞き取り調査(2)の成果を加えて相互検証・吟味を重ねることで、文書資料の訂正や真実への接近を可能とし、歴史認識の確度を高める。さらに、本研究の調査成果を基礎として、戦争にかかわる記憶の継承や活用方法について検討する。特に、島の戦争経験を継承し平和学習に活用していくための方法論について実践的研究を進めた。

4. 研究成果

本研究は本来であれば2019年度から2021年度にかけて行われる予定であった。しかしながら、2020年より始まった新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、当初予定していた調査計画を大幅に変更せざるを得なかった。本研究の調査地は医療体制が脆弱な離島地域であったことと、調査協力者がすべて高齢者であったため、2020年と2021年は聞き取り調査を実施することができなかった。その代わり、戦跡の踏査活動に重きを置いた。その後、補助事業期間を2年延長することとなったため、その期間は聞き取り調査を中心に調査を実施した。また、それ以外にも戦跡ガイドに関する調査も実施した。詳細は以下のとおりである。

(1) 2019年度は鹿児島県大島郡瀬戸内町を中心に戦跡の踏査、および戦跡に関する語りの収集、そして戦跡の「活用例」に関する調査を実施した。瀬戸内町は、奄美群島の中でも数多くの戦争遺跡が存在する地域として知られている。その中でも特に加計呂麻島と瀬戸内町古仁屋地区を対象に調査を実施した。すでに刊行されている報告書を参考にしながら、古仁屋地区および加計呂麻島に残された戦跡の現状について調査を実施した。また、戦跡の「活用」の一側面として戦

跡観光という形態があげられることから、瀬戸内町内での戦跡観光の現状やガイドによる戦跡案内の実態についても調査を行った。さらに、加計呂麻島では幼少期に島で戦争を体験した方々から戦中・戦後のようすについて貴重な証言を伺うことができた。

今回最も大きな収穫となったのは、地元の高校生による近現代文化遺産の継承活動に参加できたことである。これは、高校生が地域の過去を小学生に伝えようと企画されたイベントであったが、戦争を知らない世代が戦争のことをいかに後世に継承していくかという問題を検討する上で、ひとつのケーススタディとなりうるものであった。調査で得られた成果の一部は学会等で発表した。

(2) 2020年度および2021年度は、特に新型コロナウイルス感染症が流行していたため、基本的には戦跡の踏査を中心に行った。これらの年度は特に徳之島において調査を実施した。徳之島は太平洋戦争末期に沖縄防衛のため重要な役割を果たした島のひとつである。島の西側に位置する天城町には1943年から1944年にかけて浅間飛行場が建設され、特攻隊の中継基地として利用されていた。また、徳之島の全体に部隊が展開していたことから、島内のさまざまな場所でその痕跡を確認することができた。だが、戦跡に関する人々の関心は必ずしも高いとはいえず、その全体像も適切なかたちで把握されているとはいえない状況であった。そこで、特に2021年度の調査では徳之島に残された戦跡の現状を確認し、戦争当時のようすを知る方々に聞き取り調査を行うことで、徳之島（天城町）における戦争の全体像を把握するように努めた。

聞き取り調査は新型コロナウイルス感染症の感染拡大により短期間で実施することとなったが、地元の教育委員会の協力のもと当時を知る方々から話を伺うことができた。調査対象者はすべて天城町出身者だったことから、飛行場の建設や空襲のようすなどさまざまなエピソードを伺うことができた。

また、戦跡の踏査を行った結果、比較的良好な状態で保存されているものが多かった一方で、まだ地元住民にも知られていない戦跡もあることがわかった。今後これらをどのように保存し活用していくのが課題である。なお、今回の調査の成果はポスターにして地元の資料館で掲示した。

これらの調査と並行して、デジタルコンテンツ（VR）を活用した戦跡の体験学習方法についても検討をはじめた。大学生を対象としたワークショップを開催した結果、技術的に課題が多いものの、ある程度は有効であることが確認された。これらの成果の一部は論文等にして公表している。

(3) 2022年度は、喜界島（大島郡喜界町）において戦跡の現状確認の調査を行った。喜界島には1944年に海軍の飛行場が設置され、沖縄方面に向かう特攻機が整備・給油を行うために立ち寄る等の中継地的な役割が与えられていた。現在、喜界空港の周辺には飛行場に関連する様々な戦跡（「戦闘指揮所跡」や「掩体壕」など）が一部見学可能な形で残されている。中には保存状態が良好ではないものも確認されたため、今後どのように保存していくのが課題であるといえる。また、喜界島の戦跡に関する調査も体系的に行われてきたとはいえないことが明らかになった。情報の整理が急務だと考えている。

一方で、今年度の調査も新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、住民に対する聞き取り調査を十分に行えなかったが、地元のガイドの方から戦跡の保存状況のほか、空襲時の避難の実態について貴重なお話を得ることができた。

(4) 2023年度は最終年度となるため、聞き取り調査を中心に調査を実施したほか、本研究の成果の一部を一般向けブックレットという形で出版した。まず、聞き取り調査に関しては徳之島（伊仙町）の旧鹿浦小学校の奉安殿をテーマに実施した。旧鹿浦小学校の奉安殿に関しては設立経緯に関する資料が残されているほか、当時学校に通っていた方々がご健在であることから、戦時下の学校生活をはじめ戦争期の暮らしのようすがある程度復元可能だと考え、調査を実施した。その結果、地域社会を挙げて奉安殿を作った経緯や戦時下の学校生活のようす、そして戦後の忘却へと戦跡の移り変わりに関する情報を得ることができた。奉安殿に関しては奄美大島でも聞き取り調査を行っていたため、地域社会と奉安殿の関わり方を相対化することが可能になった。これらの調査の成果の一部はポスターにして地元の博物館で掲示されている。

また、本研究の総括として奄美群島の戦争を考える際に導入になるような一般向けのブックレットを出版した。この本では次のような内容を論じている。すなわち、(a) 戦跡考古学という視点からみた奄美群島の戦争遺跡の現状、(b) 「日常」という視点から戦争の記憶をとらえる重要性、(c) 戦争を後世に伝える存在としての「戦跡ガイド」の意義。

本研究を通じて得られた成果は、今後も学会発表や論文執筆等を通じて広く社会に還元していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 佐藤 宏之	4. 巻 19
2. 論文標題 地域の戦争の記憶をかたちづくる歴史実践	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本公民館学会年報	6. 最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24661/kominkan.19.1.4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石田智子	4. 巻 -
2. 論文標題 徳之島における文化・自然遺産の分野横断型調査	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 令和2～3年度文部科学省特別経費（プロジェクト）世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローバル教育研究拠点形成活動報告書	6. 最初と最後の頁 144-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石田智子	4. 巻 89
2. 論文標題 デジタルコンテンツを活用した戦争遺跡体験	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人文学科論集	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 兼城糸絵・中谷純江・石田智子	4. 巻 -
2. 論文標題 奄美群島における戦争の記憶	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 令和2～3年度文部科学省特別経費（プロジェクト）世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローバル教育研究拠点形成活動報告書	6. 最初と最後の頁 77-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤宏之・新名隆志・田口紘子・杉原薫	4. 巻 31
2. 論文標題 「戦争体験」を活用した平和教育における「当事者性」の獲得 歴史学的アプローチ、倫理学・哲学的アプローチに着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤宏之	4. 巻 73
2. 論文標題 地域の戦争の 記憶 をめぐる歴史実践 新たな価値の創出をめざして	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 鹿児島大学教育学部研究紀要 (人文・社会科学編)	6. 最初と最後の頁 11-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田口紘子・杉原薫・佐藤宏之・新名隆志	4. 巻 5(1)
2. 論文標題 「戦争体験」を活用した平和形成主体育成の可能性 「歴史を学ぶ際に期待される行動と目的の組み合わせ」に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本体育大学大学院教育学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田智子	4. 巻 -
2. 論文標題 徳之島における文化遺産の現状調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 令和2年度「世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローバル研究拠点の形成」報告書	6. 最初と最後の頁 13-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石田智子
2. 発表標題 奄美群島の戦争遺跡を訪ねる
3. 学会等名 第22回鹿児島大学奄美群島めぐり講演会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 石田智子・兼城糸絵・佐藤宏之
2. 発表標題 VRを活用した戦争遺跡踏査と参加体験型学習 鹿児島県を対象として
3. 学会等名 日本文化財科学会第38回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤宏之
2. 発表標題 地域の戦争の記憶をめぐる歴史実践 - 新たな価値の創出をめざして -
3. 学会等名 日本公民館学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 兼城糸絵
2. 発表標題 シマの戦争を聞く
3. 学会等名 コロナ禍の奄美群島で教育研究をどのように進めたか・進めるか（鹿児島大学「世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローバル教育研究拠点形成」プログラム・公開Webシンポジウム）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石田智子・兼城系絵・佐藤宏之
2. 発表標題 「島の戦争」の記録・継承・活用
3. 学会等名 九州考古学会総会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 一般社団法人出水民泊プランニング・出水市平和学習ガイドの会（編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 鹿児島大学佐藤宏之研究室	5. 総ページ数 115
3. 書名 未来に語り継ぐ「私の記憶」	

1. 著者名 石田智子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中国書店	5. 総ページ数 1299
3. 書名 持続する志 岩永省三先生退職記念論文集（岩永省三先生退職記念事業会 編、タイトル「戦争遺跡と大学教育」pp.529-539）	

1. 著者名 石田智子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 北斗書房	5. 総ページ数 60
3. 書名 魅惑の島々、奄美群島 - 歴史・文化編 - （山本宗立・高宮広土（編）タイトル「記憶を未来につなぐ戦跡」pp.30-33）	

1. 著者名 兼城系絵	4. 発行年 2021年
2. 出版社 北斗書房	5. 総ページ数 60
3. 書名 魅惑の島々、奄美群島 - 歴史・文化編 - (山本宗立・高宮広土(編) タイトル「シマの戦争を聞く」 pp.33-36)	

1. 著者名 佐藤宏之	4. 発行年 2021年
2. 出版社 北斗書房	5. 総ページ数 60
3. 書名 魅惑の島々、奄美群島 - 歴史・文化編 - (山本宗立・高宮広土(編) タイトル「未来につなぐ、ふるさとの記憶」 pp.37-40)	

1. 著者名 兼城 系絵、石田 智子、佐藤 宏之	4. 発行年 2024年
2. 出版社 北斗書房	5. 総ページ数 82
3. 書名 シマで戦争を考える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石田 智子 (ISHIDA Tomoko) (40624359)	鹿児島大学・法文教育学域法文学系・准教授 (17701)	
研究分担者	佐藤 宏之 (SATO Hiroyuki) (50599339)	鹿児島大学・法文教育学域教育学系・准教授 (17701)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------